

田部 昇

二重の悲劇『あゝ野麦峠』をよむ

現代の記録文学 山本茂実著『あゝ野麦峠』はその同名の続編とあわせ私の書架では途上国開発論のジャンルに分類され、主要なレファレンスのひとつとなっている。五〇〜六〇年代の主要開発論の著書と並んでいまもその同じ位置を守っている。なぜか、その理由のひとつは、いまは開発理論の古典、アーサー・ルイスの『無制限労働供給下の経済発展』（一九五四）を構成する「二重経済」モデルを理解する上で格好な経験的素材を提供すること。日本の開発経験の例証である。二つには、工業化の初期段階には年少労働という過酷な労働形態が日本にも存在した事実を生なましく伝える貴重な記録作品であること。さらに歴史的事実の蒐集は聞き書き調査の手法が有効なことを証明したお手本と見立てたからである。

明治期から大正、そして昭和初期にわたり、数百キロの野麦峠越えをした幾千幾万の〈糸くり工女〉のなかには〈不就学児童労働〉が大きな割合で存在した事実を同書の付属統計記録は伝えている。製糸工場に働く工女たちの年齢と学歴を含む企業内人事記録がそれである。なぜ、子どもは雪深い野麦峠を越えて岡谷の製糸工女となったのか。この問いに対し、著者山本茂実の元工女たちへの聞き取り調査は〈親を助けるため働きに出る〉という経済的理由が圧倒的な動機だったことを明らかにした。農村の貧困は飢餓的状况であり、岡谷の工場寄宿舎で満足な食事がとれることが何にもまして魅力であつ

た。貧しい家の少女たちは一一、二歳になると進んで女工になろうとした、という。続編に解説を寄せた小田切秀雄はこれを「二重の悲劇」と評した。それは、「すさまじい非人間的な労働と、まさにそれを組織し強行的に運営してきている会社とに対して犠牲者が自分を犠牲者と思っていない」ということを意味する。これこそ年少労働の不条理を突く指摘だと思う。

この「二重の悲劇」はすでに過去の歴史となり、負の開発経験の姿として人々の記憶のなかに生き続けている。しかし、多くの途上国ではこの悲劇の構造は未だ解き放たれる兆候はない。日本の経験と比較すると今日の児童労働問題は一層複雑化し構造化したといえる。ただ貧困という経済現象にとどまらない。社会の貧困者への偏見がさらに、貧困を生み出すという累積的逆流の危険がある。初等教育の貧困が〈不就学児童労働〉を生み、インフォーマルな労働市場を肥大化させてゆく。児童労働の廃絶にむけた国内外の法的規制は有効な決め手を欠く。これらは南アジア、とりわけインド亜大陸を念頭に置いた問題群だが、それらの解決策には社会科学領域の統合的アプローチが必要だ。いまは主流の近代化論と、子どもの人権という普遍的で、しかもラディカルなパラダイムが統合され革新的な政策論が案出されることを期待したい。若い研究者が現実をみる目を研ぎ澄まし、斬新な想像力を駆使し「児童労働の制度学」とも言うべき課題に挑戦して欲しいものだ。

たべ のぼる

1986年アジア経済研究所理事職退任、同年明治学院大学国際学部教授就任。2000年同大学名誉教授。現在、講義録の電子書籍化を進め、「田部昇 ウェブ版ゼミナール」www.tabenoboru.com公開中。